

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】松嶋 健

【所属】京都大学 人文科学研究所

【研究題目】社会的農業を通じたエコロジカル・エコノミーの構想
～グローバル化とイタリアの食・農・精神保健

【研究の目的】本研究は、イタリアで近年別々に起こってきた三つの運動、すなわち、スローフード、自然農法、精神病院の廃絶という食・農・精神保健それぞれの領域での試みが「社会的農業」という形態に流れ込んでいる現象の検討を通して、グローバル化とは異なるエコロジカル・エコノミーの論理とその具体的なあり方を考察しようとするものである。

社会的農業とは、障害者など社会的に不利な立場の人々の社会的包摂を促進するために農業資源を用いる活動であるが、それは単に雇用促進にとどまらず、労働や経済行為、そして精神保健についての実践的問い直しという側面を内包している。そこでは、協働を通じた、新たな関係性の創出が目指されている。こうした試みについて調査することで、近代経済学が扱ってこなかった「生きた自然」と、生態学が扱ってこなかった社会環境や精神環境とが交差する地点から、現行の経済原理とは異なるエコロジカル・エコノミーのあり方について考察する。

【研究の内容・方法】イタリアにおける社会的農業は、主として社会協同組合によって担われているが、社会協同組合というのはもともと 1970 年代に精神医療改革の文脈の中から出てきたものである。それは精神障害に関わる問題を個人の心の問題としてだけ捉えるのではなく、社会的かつ精神的な環境に関わる問題としてより広く捉え、「共に働く」ということを通じて精神的健康を実現しようとする試みの一部と考えることができる。

同時に 1980 年代からは食のあり方を問い直すスローフード運動が立ち上がり、またそれと並行して近代農業のあり方を問い直す自然農法（有機農業からバイオダイナミクスまで）が広がってきた。そしてこれらの動きが一つになった試みとして、「社会的農業」がイタリア各地の、主として社会協同組合で実践されている。そこで、そうした試みを行なっている社会協同組合を対象として、参与観察とインタビューを主な方法としながら、社会的農業が新たな「生業」としてどのようにして実践されているかについて調査する。

その際、社会的農業を新たな「生業」として捉えるのは、伝統的な人類学の考え方からすると、人は食べるためにのみ労働するのではなく、生業を通じて他の人間や動物、自然環境との間に持続的な共生関係を築いていくのであり、社会協同組合のなかでの社会的農業の実践には、そうした諸々の関係性の創出という側面が色濃く認められるからである。生業には、生産・分配・流通・消費・廃棄に関わる技術的な活動系と、儀礼的・文化的な活動系の両方が含まれるが、そこに生態学的側面、技術的側面、社会的側面、知識的側面、美的側面、情動的側面のすべてが関わってくるのであり、本研究は、現地でのフィールドワークからこうした諸側面に注目しながら、その文化生態経済学的含意を明らかにしようとする試みである。

【結論・考察】具体的な調査地としては、南イタリアの社会協同組合ラ・コントラーダ・ディ・サン・ニコラ、コンヴィチーノ他を対象として、2013 年 4 月から約 1 ヶ月現地に滞在して調査を行なった。

そこで社会的農業にたずさわっている人々は、障害を持った人や受刑者など、従来の社会の中では生きる上で困難を抱えていた人たちが多く、調査から見てきたのは、現行の社会においては「障害」などを基準の一つのカテゴリーのもとに捉えられ、結果として社会的弱者の立場に置かれることを余儀なくされるのに対して、社会的農業を通して、障害も含めた多様性の同居そのものが、他の人々にとって有用で有意義であ

りうる活動を可能にしていることが理解され共有されているということである。

しかもそれは人間に限られた話ではなく、植物や微生物との関係においても同様のことが語られる。ここでは、人間の存在だけが前提された社会と経済ではなく、多種多様な生物を前提とした社会と経済のロジックが垣間見られている。まだまだ考察は不十分であるが、この視座を掘り下げ、生きた自然をベースにしたエコロジカル・エコノミーの原理の探究をさらに深めていくことにしたい。